下を略せりと見て可なるべし、或上古の自語なるべし、

〔燕石雜志一〕物の名

妻はつれまつはるの略歟、いにしへは夫婦相共に稱してつまといへり、

〔日本書紀景行七〕四十年、日本武尊每有顧弟橘媛之情、故登碓日嶺、而東南望之、三歎曰、吾嬬者耶、嬬此云莵摩、故因號山東諸國、曰吾嬬國也、

〔萬葉集四相聞〕大納言兼大將軍大伴卿歌一首

神樹爾毛、手者觸云乎、打細丹、人妻跡云者、不觸物可聞、

〔釋親考〕嬪、婦也、

正字通、通雅云、妻曰鄉里薩薩愛抱未蒙、夷稱也、沈約山陰柳家女詩、還家問鄉里、詎堪特作夫、鄉里謂妻也、

〔日本書紀十四雄略〕三年〇安康八月、穴穗天皇〇安康意將沐浴、幸于山宮、遂登樓兮遊目、因命酒兮肆宴、爾乃情盤樂極間、以言談顧謂皇后、〇註略曰、吾妹稱妻爲妹、古之俗乎、蓋汝雖親昵、朕畏眉輪王、

〔物類稱呼人倫〕妻つま、京にて他の妻をお内義さんとよぶ、大坂にてお忍さんとよぶ、お家さまなり江戸にてかみさまといふ、甲斐にて中居といふ、甲州の國風の歌に、甲金や三升升に四角箸切はふづくりをこれお中居とよめり播摩邊又越後わたりにてごりよんと云、よめ御料などの轉語かなり奥州南部又は津輕にてあつぱといふ、吾が母なるべの轉語し、小兒の母に對して云か、仙臺にておかたといひ、又ごゞさまと呼は、たつとぶ詞なり、御は尊稱也、御は女の通稱也、故に御をかさねて唱るにや、又仙臺にては、媳婦を呼てをむかさりといふ、上總にてめこといふ、源氏に、めこのかほも見で と有、これは吾妻也、他の妻をばをぢようと云、御女郎の略語か伊勢にやよといふ、下賤の妻をいふと也尾張にてお家とよぶは、江戸にてお袋といふにあたる、同國にてかみさまとよぶは、老女の稱也、對馬にてをゆみといふ、肥の佐賀にてをとも女郎といふ、おともは手前の事をいふ、おとゝいふ時はそこもとゝいふにひとし、